

論文要旨

中学生における認知的学校環境と健康の関連についての検討

笠原江美

日本の中学生の抱える問題の多くは、学校での環境に左右されると考える。なぜなら、義務教育の範疇である中学生は、多くの時間を学校で費やし、多くの人間関係を学校という場で培うためである。

本研究では、生徒から見た学校生活のあり方を、認知的学校環境とし、どのような事柄から構成されているのかを示した。また、その認知的学校環境が生徒の学校生活への基本的な活力となる健康感に、どのように影響を及ぼしているのかを検討する。

認知的学校環境と健康の関連を検討するモデルを構築し、認知的学校環境が健康の関連を検討した。ここで、本研究の健康感を、「学校へ行こう」「教室へ行こう」という気持ちが湧くための基本的な活力とした。

まず、生徒たちの認知を通して、学校環境を明らかにする方法を検討した。都内の中学生 1565 名を対象に、アンケート調査を行った。その結果、中学生の捉える認知的学校環境では、「教師の日常生活での関わり」「保護者の学校生活への関心」「授業の達成手段性」「生徒間協力」「いじめへの教師の態度」「校舎の快適性」の6つの側面についての尺度を作成する事ができた。

そして、これらの認知的学校環境が「不登校感情」「自己価値」「努力価値」「うつ症状」の4つの健康感に影響を及ぼしていることが示された。また、これらの「認知的学校環境」と「健康感」の関連には、男女差があることが示された。

男子は、「教師の日常生活での関わり」「授業の達成手段性」「生徒間協力」「いじめへの教師の態度」が、本研究における「健康感」に影響を与えていた。また、女子では、「教師の日常生活での関わり」「保護者の学校生活への関心」「授業の達成手段性」「生徒間協力」「校舎の快適性」が、「健康感」に関連があることが明らかとなった。

また、男子は、「自己価値」への支援が「うつ症状」の低下と関連しており、女子では「不登校感情」への支援が「うつ症状」の低下と関連していることが示唆された。